平城宮北方遺跡の調査
―第359次

1　はじめに

調査区は日葉酢媛命陵の前方部周濠の南にある山陵町八幡神社の南方に位置する。現地形は東西方向に谷状に低く、かねてから平城宮に関わる遺構の可能性や、中世の超昇寺城に関わる遺構の可能性が指摘されていた。

畑造成に伴う緊急調査で、調査期間は平成15年５月14日～５月21日、面積は48㎡である。

2　検出遺構

調査の結果、北側で地山の大きな落ち込みを検出した（SD2820）。SD2820の南肩は直線的に１段落ちたところで、幅１m弱の水平な平坦面をもち、さらに直線的に落ち込む。平坦面から約１mほど掘り下げると、マツなどの植物遺体を大量に含む青灰色砂質土（堆積土）に達したが、溝底まで確認することはできなかった。

遺物は摩滅した埴輪片が数点出土した程度で、埋没の時期を決定づける遺物は出土していない。しかしながら、植物遺体の遺存状況や、規模ないし犬走りと考えられる平坦面を持つことから、1580年（天正８）年まで存在が知られる超昇寺城の濠の可能性が高いと思われる。

また、一段高くなった南側では地表下約60～70cmで地山を検出、地山面を切り込む遺構を検出した。SD2821の埋土中に、階段耳石が出土した。南東隅では黄橙色砂質土の盛土を検出し、超昇寺城の土塁の可能性がある。

3　まとめ

周辺の調査は、いずれも小規模であるが、第174－５次、第234－17次、第215－６次、第293－４次調査では、近世の大溝を（図203イロ部分参照）、第183－19次調査では、土塁とみられる遺構を検出している。

今回、検出したSD2820からは時期を特定できる遺物の出土がなかったが、犬走りを持つような事例は戦国時代の城の濠などで見られること*や、植物遺体の状態から、超昇寺城に関連する時期のものであろう。

これらの遺構が、いずれも超昇寺城に関わるものだとすると、これまで想定されていたよりも、北西に広がる可能性もあり、今後の調査が注目される。　（神野　恵）

＊村田修三氏、千田嘉博氏よりご教示。

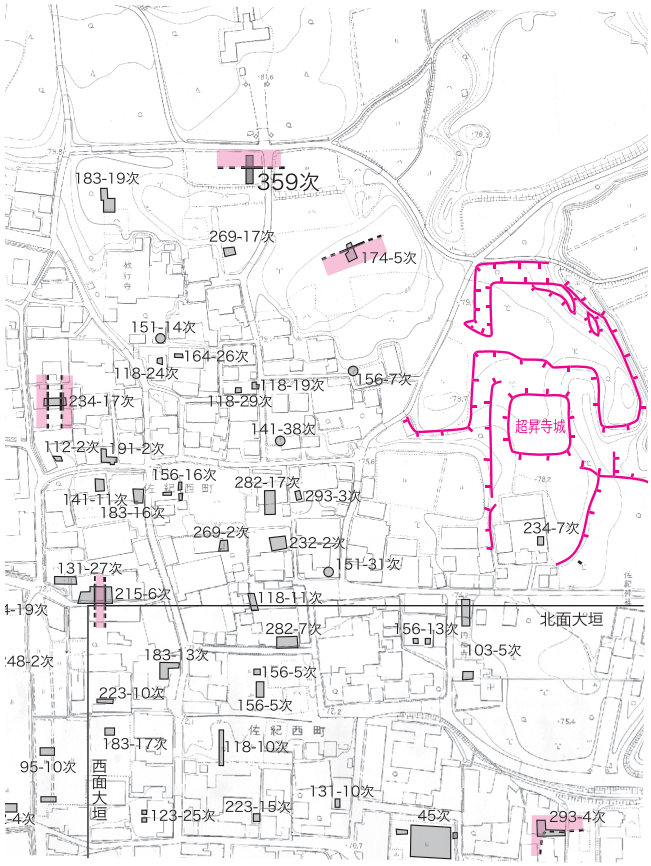

図203　調査区位置図（１：3000）と周辺の調査
（超昇寺城跡推定線は村田修三1980「超昇寺城」『日本城郭大系』第10巻による）

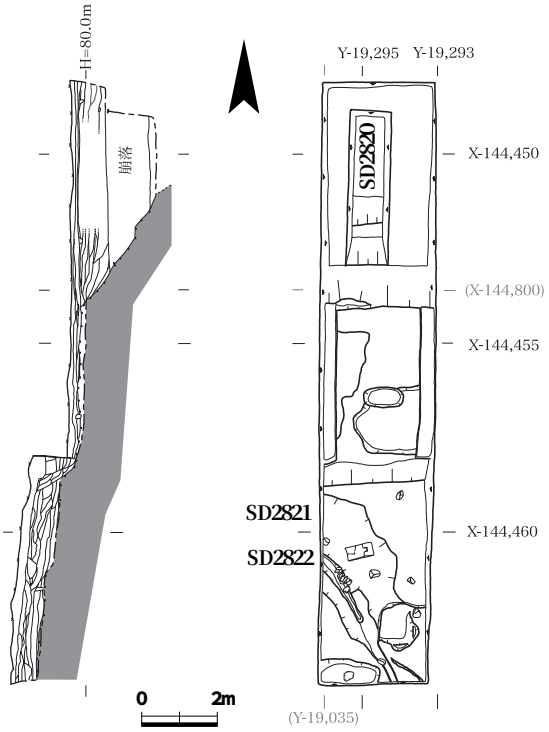

図204　第359次調査平面図・東壁断面図　１：200